

臨床仏教者の役割と展開

花園大学 西岡秀爾

本発表は、社会における様々な苦の現場で活動する臨床仏教者の役割と意義を考察し、仏教の社会的実践の今後の展開ならびに課題について論じる。特に、論者も所属する「いのち臨床仏教者の会 (Association for Buddhist Chaplains on Life and Spirituality)」の公共的取り組みを紹介しつつ、仏教者が地域社会の「もやい直し」にどのようにかかわることができるかその可能性を探りたい。

地域にある寺社をはじめとする宗教施設は、各々の伝統的行事を催すことにより、そこに暮らす人たちとの連帯を強め、精神的礎の一端になってきたことは紛れもない事実である。連綿と続いてきた地域資源としての宗教施設を今後どのように活かしていくことができるのか。厳しい政教分離の下、宗教側からの一方的な社会への働きかけは徒労に終わる可能性が高い。むしろ地域住民と共に協働するなかで、自然と有効利用されていくと考えられる。仏教も例外ではない。布教・伝道ではなく、「伴走型」のかかわり合いが大前提となる。つまり、教義・袈裟という鎧を脱ぎ、生身の人間で参画していくことが鍵となる。

そして、仏教者が公共的場で活動するためには、東北大学・龍谷大学の「臨床宗教師」、臨床仏教研究所の「臨床仏教師」、いのち臨床仏教者の会の「臨床仏教者」などの人材養成講座を受けて、高い公共性と専門性を身につけることが近道かもしれない。しかし、人材養成プログラムを受講しなければ「臨床」に立てないわけでは決してない。各々が与えられた場で、自らの弱さや無力感に打ちひしがれながらも、目の前で苦悩する人たちに向き合い寄り添っていく中で、宗教性や人格は磨かれていく。被災地や医療・保健・福祉の現場だけが「臨床」なのではない。「苦」を抱える人がいれば、その場こそが「臨床」である。つまり、「臨床」にある苦に試行錯誤しながらも正対し続けることで、宗教性が研がれ、名実ともに宗教者になっていくと考えられよう。

さて、「臨床仏教者」としての一番の役割は、誰もが何らかの「つながり」を感取し、それを抛りどころとして生き抜こうという気力を生起させることであると考えている。様々な苦によって孤立を覚える人に対して「つながり」をもやい直す支援は、生きる力を回復させる糸口になることを経験している。「決して一人ではない」という安心感は、「老・病・死」の苦しみや恐怖を和らげてくれる。例えばターミナルケアの現場において、死にゆく者が「生者の心の中で生き続ける」ことはできるという捉え方は、死への恐怖を緩和してくれる。それとは反対に、遺される者が「大切な人は、死んでも見守ってくれている」と感ずることができれば、悲しみを抱えながらも生きる原動力に繋がる可能性がある。

仏教の存在意義は、有縁者に「仏の教え（法）」が伝わり、その人の抛りどころとなることである。その仏教に縁を持ってもらうためには、やはり「仏の教え」を礎とする仏教者（僧）の社会でのあり方が問われてくる。現代日本社会において仏教の存在意義を広げていくためには、仏教者は過度に教義に縛られることなく、臨床における「老・病・死」の苦しみにしっかりと向き合い続けることができるか否かにかかっていると言えよう。檀信徒獲得のためには従来通りの「布教型」実践が必要かもしれないが、公共的場で社会的活動を遂げていくためには布教・伝道ではなく、「伴走型」実践を立脚点としていくことが基本となる。地域において仏教者に何ができるかを真摯に模索し続けていけば、その姿勢は自ずと地域社会に伝わり、仏教ならびに寺院の再生に繋がっていく。さらに、仏教者は「宗教的役割」を担う存在としてだけでなく、「公共的役割」をも果たし得る存在として地域社会に活かされていくと考えられる。

仏教者は、苦縁によって出会う人たちと、今という時代を「共に」生き抜いていくという姿勢を保つことによって、苦に向き合い続けてくれる「伴走者」としてこれからも必要とされるのではなからうか。

キーワード：臨床、超宗派、公共的役割、もやい直し